

他者と出会う場所

障害者の地域生活運動の正統的周辺参加論による検討

猪瀬浩平

1、はじめに：人々が出会う場所

出会いについて語りたい。それも単なる出会いではない。「眼を見張る」ような体験を含んだ、そんな出会いである。

P・M シュールは「驚異とは、何よりもまず眼を見張ることである。しかし、それはまた、ありそうにもない作用、運命を立て直す作用なのである」と指摘する。この「眼を見張る」行為のなかにこそ、自らの身体性を含めて基盤となる価値観が疑われ、そこに自己変容の契機が潜む（シュール 1983；小松 1988）。

本論文では、近代社会の中で生活の場を分けられた障害者と健常者との出会いに注目する。互いに「他者化」されたもの同士の出会の中で起こった変容を「学習」という切り口で整理するとともに、そこで発生する共同体が如何なるものなのかを考える。

「障害」とは何か。この問いは、取りも直さず「健常」とは何かという問いでもある。

例えば、杉野昭博が提唱する障害者への文化論的アプローチにおいて障害者の文化は、彼が設定するところの支配文化としての、健常者の文化への対抗言説を生み出す、健常者の文化と本質的な差異を持ったものとして考えられる

（杉野 1997）。そのため、「健常／障害」の二分法的対立が再生産され、それぞれのカテゴリー内部の多様性は捨象されることになる。

一方、障害の社会モデルを提唱する M. オリバーは、支配社会の構造が特定の身体的差異を障害化、スティグマ化し、その恒常性を維持していると語り、「障害」概念の社会的構築性を指摘する。ここにおいて、個人の経験としての「障害」のみならず、身体的側面として存在する「障害」は問題化されなくなってしまう（Oliver 1990）。

両者において欠けているのは、法律や医学、障害者運動の言説における「障害」の表象と、障害者の日常実践の弁別である。前者において「障害（者）」は、脱－時間的なものとして存在している。一方、後者は前者を、日常生活の様々な文脈に即して、反復、模倣、受容し、ずらすものとしてある。酒井直樹によるならば、前者を「種的差異」、後者を「雑種の差異」とも言える（酒井 1997）。

そしてこの「雑種の差異」こそが、障害者と健常者との出会いの中で立ち現れ、また障害者－健常者という二分法的対立を超えうる可能性を持っている。

本論文では、私が 2000 年から資料収集と、関係者の聞き取りを継続して行っている、埼玉県東部地区で活動するわらじの会を取り上げ、障害者が実家や施設から飛び出す中で起こった「出会い」について検討する¹。

2、わらじの会の実践²

2.1 「はばたく家」から「自立生活プログラム」

へ

明治学院大学 教養教育センター

連絡先：猪瀬浩平

〒244-8539 横浜市戸塚区上倉田町 1518

coppe@gen.meijigakuin.ac.jp

受理日：2007 年 11 月 30 日

1976年、越谷市の市役所の若手職員たちが、自分達の職場や働きかたを問い直してゆこうと、「がんばろう会」というグループを作った。その活動の中で、若手職員はこれまでは「ケース」として接してきた障害者を「同じ街に生活する者同士」として見直し、家の外に出ることのない障害者と一緒に花見や動物園に行くようになった。1978年に、共鳴する市民や近隣に住む障害者・家族などが合流し、「障害をもつ人ももたない人も共に街で生きよう」をスローガンとして、わらじの会が結成され、「街に出る会」を定例で開催するようになった。

そんなわらじの会の活動に参加した人々が置かれていた状況は、如何なるものであったのか。

養護学校や特殊学級が今ほど「整備」されてはいなかった当時、「重度」と判断された障害児の多くは、地域の学校から就学を拒否されていた³。同様に、作業所や授産所が限られていた為、学齢期以降の居場所もなかった。結果、就学－就労を拒否された障害者は、家や療護施設など、きわめて限られた範囲の中で生活することを余儀なくされていた。

設立当初のわらじの会の活動は、このような状況にあった障害者が「街」に出る為の、小旅行やバザーをおこない、積極的に「在宅の重度障害者」への呼びかけを行っていた。しかし活動は休日が中心であり、その主導権を握っていたのも健常者のボランティアであった。そのため、次第に支援する健常者と支援される障害者の関係の方が重視され、障害者同士の関係が生まれにくいという問題が指摘されるようになる。

これらの問題に直面する中で、1981年から、メンバーの家の敷地内に立てたプレハブや、公民館を利用して、「自立に向かってはばたく家準備会」（以下「はばたく家」と略する）と言われる平日の活動が行われるようになった⁴。ここでは、障害者同士のつながりや障害者の主体性が重視され、健常者なしの話し合いの場もつくられた。また活動をサポートするボランティアの募集や、在宅障害者宅への参加の呼びかけ訪問を、障害者自身が中心に行うようになっていく。

ここでは、「一般社会で自立していこう」という目標が立てられた。そして家族に依存しない、彼ら言うところの「自立生活」の為に必要な知識や身体技法の習得を図る一連の活動が行われた。

例えばその一つが、電動車椅子の練習であった。電動車椅子は、県のリハビリテーションセンターで、医師の診断を受け、必要と判断されると無料で支給された。しかし外出する機会がなかった当時のメンバーの多くは、支給申請そのものを行っていなかった。平日の活動に参加するにあたり、光子さん、幸子さん姉妹は、電動椅子の支給を申請する⁵。

電動車椅子に乗るのは、一見簡単そうであるが、これにも独特の技法がある。外出の経験がそもそも少なかったわらじの会の障害者にとって、車や自転車、歩行者の中、また段差のある街を移動すること、道を覚えること自体が負担となる。その為、操作法の習得のみを目的とせず、実際に介助者なしで街の中に出て、通行人や駅員に介助を頼みながら、電車に乗る練習、買い物をする練習が行われた。電動車椅子は、その際の移動の手段として利用された。電動車椅子の技法やそれに伴う外出の技法を習得することで、外出を一人でできるようになった。

「はばたく家」の活動は、わらじの会がケアシステムや授産施設、店、生活ホームの運営を始めていく中で、次第に拡散しそれぞれに包摂されていく。その中で、「自立生活」への取り組みが一つのプログラムとして抽出され、在宅の障害者に提供されるようになった。これが、1991年に始まった「自立生活プログラム」である。

わらじの会の発足当時とは異なり、この時期には養護学校の「整備」は終わり、障害児と判定された子供の教育が一応、保障されるようになっていく。これを「進歩」として評価もできるが、わらじの会の中では次のような否定的見解が示されている。即ち、障害児だけが集められる養護学校は、社会から隔離された特殊な空間であり、地域で実際に生活する為の能力がなくなってしまう。そこには、彼等を支援する教員しかおらず、同年代の「健常者」との日常的な交わりもない為、依存的な傾向が強まって

いく。また、一方で養護学校を卒業しても就職先はなく、結局、「家にこもりっきり」の生活を余儀なくされる、と⁶。

わらじの会の「自立生活プログラム」は、このような状況認識の下、次の目的のもと具体的な活動を行う。即ち、①悩みを相談できる仲間づくり、②「自分でできること」と、「自分でできるけど人の手を借りた方がうまくできること」の違いを知ること、③地域に出る中で、失敗を繰り返しながら、自分が何をしたいのか見つけ、個人の生活をつくっていくこと、この3点である。当時リーダーを務めていた、脳性麻痺の男性藤崎さんは、「一人でも多く町に出てもらって、一緒に町を良くして行きたかった」、と思いを語っている。

これらの目的のもと、一定の期間を区切り⁷、電動車椅子や生活保護等の諸制度の紹介と活用法の講習や、銀行の口座づくり、買い物や料理の体験や、遊園地などへの小旅行が行われている。リーダーには、わらじの会の活動の中で「自立生活」を始めた障害者当事者がなった。参加者は、当初その全てが在宅であり、多くは普段わらじの会の運営する店や通所授産施設、小規模作業所に通っていた。この中から、次第に「自立生活」を始める人が出ている。

ここでは、リーダーの権威を媒介にした一方的伝達ではなく、リーダーと参加者との間に対等な関係が求められている。その為、プログラム内容の計画や、実際に起きた問題への反省は、活動の補助を行う健常者を含めた、参加者全体で一緒に考えていくことが重視されている。活動内容自体は、「はばたく家」の活動と大差はないが、実際に自立生活を行う障害当事者がリーダーとなる点や、「知的障害者」が多く参加するようになった点などに変化が見られる⁸。

2.2 生活ホーム

わらじの会の誕生以降、活動の展開の中で、家を出て生活を始める人が出てきている。しかしそのほとんどは、介助なしでもある程度一人で生活できる、「軽度」の「身体障害者」であった。そんな中で、1990年に生活ホームの運営が始まる。

生活ホームとは、「自立生活」を望みながら、家庭環境や住宅事情等の理由でそれが困難な障害者の「自立」を促進する為に利用される共同住宅である。埼玉県独自の制度で、世話人を置く費用が、県と市町村から補助される。知的、身体など障害の種別に関係なく利用でき、定員は4名以上10人未満である。

これは捉え方によっては、施設と変わらなくなるが、わらじの会においては、基本的に「ケア付きのアパート」と捉え、個人の生活の管理は行わない。構造上も、各部屋は個室になっている。建物は、当初から活動に参加する脊髄小脳変成症を持った光子さん、幸子さん姉妹が父親から相続した住宅が利用された。ここに光子さん、幸子さんの他に、脳性麻痺の男性3人（40代1人、20代2人）が入居した。

生活ホームでは、世話人によって最低限の介助が保障されている為、とりあえず家の外に出て、家族のいない生活に慣れることが可能になった。この間、生活保護や公的ヘルパー派遣の申請が行われ、また介助体制も固められている。その結果、入居した若い二人は現在、それぞれ公営住宅で生活を行っている（内一人は結婚による）。彼らの後には、「知的障害」のある3人を含めた5人が、新設された1つを加えた2つの生活ホームに入居している。それぞれの生活ホームの一室は、体験入居室とされ、施設や親元で暮らしている人が、一人暮らしを短期間体験できるようにしている。このように生活ホームは、さらなる「自立」の為のステップとして捉えられる一方で、「知的障害者」や「重度」の「身体障害者」など、常時介助を必要とする人に、「自立」の場を提供する役割をもっている。

2.3 ケアシステム「わら細工」

今まで家族によって介助されていた人々が、家を出て暮らす為には、日常の介助を行う人々の確保が必要になる。その為、生活ホームの設立に合わせて、介助サービス事業（ケアシステム）が始まっている。これは、介助を依頼した障害者に対して、介助者として登録した人を、有償で派遣するシステムである。

ここで無償ではなく有償であるのは、介助を労働として位置付けることで、支援者優位に

陥りがちの介助関係を障害者優位に転換し、介助者の側に責任意識をもたせること、そしてまた、介助者の数を確保することを目的としている。介助者の側にも、契約関係を結ぶことにより、頼まれた以外の仕事を拒否できるようになるなどのメリットがある。なお、介助料は、生活保護を受けている障害者に支給される他人介護加算や、肢体不自由の「身体障害者」に支給される全身性障害者介護人派遣事業など、公的な補助金によって支払われていた⁹。

介助サービスの調整や、介助者及び依頼者に対する研修・相談業務など、この事業の具体的な運営には、障害当事者があたっている。これは、「介助を受ける立場でもある障害者が運営に携わることによって、障害を持つ利用者の声を親身に受け取ることができる」こと、そして「事業の運営を障害者の仕事として認知させること」¹⁰にあるとされている。

このような事業を行う中で、地域で暮らすのに必要な介助料が把握されるとともに、障害当事者主体による運営という新しいスタイルを提示できるようになった。その結果、行政に対して、具体的に説得力のある形で、支援拡大を要求できるようになったのである。

介助者として登録したのは、主に近隣に住む主婦や学生であった。もともとわらじの会の活動にボランティアとして関わっていた人もいたが、ここで初めてわらじの会へ関わり彼らは、主に生活ホーム入居者の介助にあたるようになった。「はばたく家」や「自立生活プログラム」とは違った形の出会いが、ここで障害者と地域との間に生まれている。

3、「障害」をめぐる日常実践

3.1 正統的周辺参加論

わらじの会において、障害者の「自立生活」が生まれる過程は、その障害者個人の過程ではなく、障害者の身体をめぐる展開される社会的折衝の中に定位されるものである。そしてそこには、「自立生活」をおくっている障害者自身をはじめ、これからそれをはじめようとする障害者、介助者やボランティアなどの支援者、車椅子などの道具、地域社会、そして行政を含

めた様々な要素が複雑に絡まり合っている。これらの関係を解きほぐす為に、レイヴとウェンガーが提出した「正統的周辺参加論」によりながら議論を展開していく。

人類学の主流を占める理論において、文化を学習する主体や、文化を学習する過程が注目されることは少なかった。注目されたのは、時間を超越して存在する「ヌアー文化」や「ホビ文化」、あるいは「日本文化」であった。ここにおいてそれぞれの文化は、その成員が獲得すべき知識の集合体として設定される。成員となる個人は文化的な知識が書き込まれる真っ白なノートとして分析の背景に置かれ、書き込まれる文字としての「文化的知識」に焦点が当てられた。

レイヴとウェンガーは、これに異議を申し立てる。彼女らは、このような「文化」概念がもたらす帰結を、言葉で伝えられる一般的知識だけが重視される事態に見る。この延長線上に、学校教育への絶対視が存在する。そして、個々の社会的、身体的実践の中で立ち現れる、具体的な知識や技能、そしてそれが習得される文脈に目を向ける。これによって学習論は、身体論として、あるいは関係論として拡張されることになる。

『状況に埋め込まれた学習』において、レイヴとウェンガーは、伝統的徒弟制をモデルに、新参者と古参者、技能、アイデンティティ、利用される道具や知識、技能の集合として、実践共同体 *communities of practice* という分析概念を打ち立てる。この議論において、学習は、学習者が特定の実践共同体に徒弟として正統的周辺参加 *Legitimate Peripheral Participation* し、熟練のアイデンティティと身体技法の獲得により、十全な参加者になっていく過程、及びそれによって実践共同体が再生産されていく、状況的学習の過程と定義される（レイヴ＋ウェンガー 1993）。

このように、実践共同体へ全人格的に参与し、十全な参加者へと緩やかに移行していくという、学習過程についての枠組みを導入することによって、障害者だけではなく、支援者や道具、地域社会、行政などのわらじの会を構成する多様な要素を、実践共同体にそれぞれ配置で

きるようになる。そして自立生活が生まれる過程を、これら諸要素間で日常的に展開される相互行為の中で分析していく視座が確保される。

3.2 わらじの会の実践共同体

それではわらじの会における実践共同体とは如何なるものであるのか、ここで歴史的な生成過程を踏まえながら、描写していく。

わらじの会においてその成員性の基盤は、「障害者」という種的差異に基づいている。発足当初の呼びかけにおいても、その後の勧誘においても、その第一の対象は「障害者」であって、「外国人」や「女性」ではない。

留意しておく必要があるのは、わらじの会に参加するまで彼／彼女は、それぞれ圧倒的多数の健常者の中に分断されていた点である。新聞の紹介記事を見てから、「はばたく家」の活動に参加するようになったある中途障害の男性の例を挙げよう。彼が事故の後に入院していた病院のリハビリ棟には、彼と同じようにリハビリを行う障害者が多数いた。訓練の一貫と考えられていた為、外出する人が多く、病院の周りの店も彼らに好意的であった。しかし退院すると、事態が一変する。

「(退院して)ひとりで出歩く自信がなくなりました。だれも、車イスに乗った人なんていないのです。約一年間、家の中へとじこもりがちでした。外に出るのも自動車に乗って……まわりから見られても、だれも車イスに乗っているなんて、わからないもの。「だれかいなかな? 同じ障害をもった人……」などと思っていました(わらじの会 1982)」。

わらじの会への参加によって、彼らに、或いは空想されていたのかもしれない自分以外の障害者との出会いの場がもたらされる。そして彼らは「障害者」として集団化されていく。

活動の展開の中で、親元を離れ、「自立生活」を始める人がいる一方、養護学校の卒業生や在宅の人の中から新しい参加者も出てくる。わらじの会の場合、この中には「身体障害者」のみならず、「知的障害者」とされる人も含まれている¹¹。それが、時に緊張関係を生む。設立当

初から活動の参加している、ある「身体障害」の女性は、次のように語る。

「私は車椅子は車椅子だけにして欲しい。やっぱり話のわかる相手がいいの。話の通じる相手っていうのかしら。知恵おくれの人とかってよくわからないでしょ(矢野 1991:170)」。

しかしそれが逆に、「障害者」に対する意識を変容させもする。「自立生活プログラム」でリーダーを務めたことのある、養護学校出身の脳性麻痺の女性は次のように語っている。

「参加するようになってから、今までいろんなことがあって、I君とかYちゃんとかだんだん見えてきたっていうか、今まで知ってた事と違って見えた。私がいままでつきあってきた障害者って養護学校の人たちで、ほとんどが身障者だから、そういう知恵遅れとかそういう人たちとあんまり関わりなかったのよ。出会うチャンスがなかった。

みんな一人一人持ってる個性が、いろいろなひととかといろいろ関わりを持ってたら、みんなだけじゃなくて私も大きくなっていくんじゃないかなって、思ったの」¹²。

このような「障害者」内の緊張と融和の中で、十全的参加者である「自立生活を行う障害者」に向かう為の実践が行われているのである。

わらじの会の活動には、それを支援する多数の健常者が参加している。この中には、わらじの会の諸々の活動において障害者の支援や運営そのものに携わり職員として給料をもらう人から、ケアシステムで契約し生活面の介助を行う人、そして運営会議や折々の行事に参加する無償のボランティアがいる。これらは便宜上の区分であり、職員や介助者とされる人も、わらじの会が活動を行う地域の中に住んでいる為、仕事以外の時間に個人的な問題について相談し合ったり、一緒に外出したりといった、広がりのある関係が生まれている。

これらの人々が地域社会の中に広がったのは、障害者が、わらじの会の活動に参加して街に出る中で、その社会的認知を高めたことによ

る。例えば、発足後しばらくして行われた「はばたく家」の活動の一環として、街頭での販売活動や、「介護人」募集のビラまき・ポスター貼りが行われている。これには、単なる活動の資金の調達以上に、「いろんなひととふれあい」、地域の人々に「障害者も住んでいる街であることを気づかせる」という目的があった（わらじの会 1982）。

障害者が家の外に出てこなかった当時、地域社会にとって、その存在自体が注目に値した。加えて、車椅子で階段を上る為には通行人の助けが、手が動かせない人が買い物をする為には他の客や店員の助けが必要であった。そこから、元々は知られざる隣人であった人々との間に関係性が生まれていく。そしてボランティアとして、活動に参加する人も出てくる。さらに生活ホームの設立によって「自立」する障害者が増えると、介助者の確保が要請されるようになる。その為ケアシステムが設立され、有償介助が保障されると、介助者として彼らに関わる人々が増えるとともに、「自立生活」を通じた地域との日常的関係にも広がりが見られるようになった。このように、支援者は、わらじの会と地域社会とを結ぶ緩やかなつながりの中に立っていると言える。

一方、街に出ることが、障害者の存在を想定していなかった地域社会の側に、戸惑いや反発を生じさせもする。設立当初の活動においては、介助者のいない場合に電車に乗るのを拒否される、公民館の使用が制限されるといったことが起きた。また、「部屋が汚くなる、匂う」などの理由で、入店を拒否されるということも起こっている。このような問題に対して、障害者が集団で抗議文を提出する、質問に行くなどの対応が取られた。

障害者を出す側である家族との間にも、軋轢は生じている。実際、現在「自立生活」を送っている人の多くは、そこに至るまでの過程で家族の反対にあい、家に留まることを求められるといった経験や、「一生安全に暮らせる」療護施設への入所を迫られるといった経験を持っている。また「ひとりで街に出るのは危険だ」と参加そのものに反対された結果、それ以来わらじの会との関わりがなくなってしまった人も

いる。このような軋轢が生じる一方で、自分の子供以外の介助者として、わらじの会に日常的に関わっている親も多数いる。

行政は活動資金の助成や、障害者個人の介助費の補助を行うとともに、ホームヘルパーを派遣する主体として存在している。これらの補助は、もともと与えられていたものではなく、わらじの会をはじめとする障害者団体の社会的認知の拡大や、越谷市や春日部市、埼玉県に対して長年に渡り展開してきた行政交渉の成果によっている¹³。

以上を踏まえて、わらじの会の実践共同体を、十全的参加者である「自立生活」をする障害者を中心に、新参の障害者、職員や介助者などの支援者が、緩やかな境界で内部をつくりだしながら、それと連続する地域社会や家族、そして行政と、緊張関係を含みながら結びついているものとして定位できる。

3.3「自立」する身体の構築

わらじの会の実践共同体に新しく参加する障害者は、どのように十全的参加者となっていくのだろうか。これを身体技法の習得という観点から見ていこう。ここで言う身体技法は、わらじの会において「自立生活」を送るのに必要とされるもの、例えば電動車椅子を使った移動であり、買い物であり、介助である。

脳性麻痺などで自力歩行が困難な場合、電動車椅子が利用される。これは、重度障害者のシンボルとしてネガティブに捉えられていることもあり、自力で何とか歩ける人やその家族が利用を躊躇うこともある。彼らは、自力で歩くこと、それができなければ手動車椅子を使うことに、より多くの価値を置く。しかし、わらじの会では、自力で何とか歩ける人であっても、電動車椅子の利用によって、一人の外出が可能になり、行動範囲も広がる点が強調される。歩けるようになって健常者に近づくことや、障害を隠すことは求められていない。電動車椅子は「自立生活」の実践を支える道具として、身体の拡張領域に位置付けられる。

ここに、健常者中心に構築された歩行観からの離脱や、効率性の追求を見出すことができる。事実、生まれてからずっと四つんばいで這

っていた人にとって、歩行は自然な行為ではない。彼らにとって、無理をして健常者と同じように歩くことよりも、電動車椅子という、別の手段を使い、彼らと同じように移動することの方が重要であると言える¹⁴。

しかし、一方にあるトーキングエイドとの消極的關係に目を向けた時、この解釈は一貫性を失ってしまう。トーキングエイドとは、キーボードに打ち込んだ文字を音声化する機械であり、言語障害が「重い」人がコミュニケーションを図る際に利用される。だがわらじの会では、言語障害がある人でも、多くの場合これを利用しない。その理由は、自分の肉声を聞いてもらえないことへの嫌悪から説明されている。ある女性は、「トーキングエイドを使うと私の言葉を聞いてくれなくなる」と語る。ここに道具を使うことで、自らの身体を否定されることに対する警戒感が示されている。

このような警戒感は、実は電動車椅子の利用に対しても存在している。石川准は、電動車椅子で移動するようになった結果、人前で四つ這いするのに恥じらいを感じるようになり、自らの身体障害を自己受容できなくなった、ある男性の例を挙げている（石川 1999：61-62）。健常者中心の「歩行」観から離脱を図るものとして解釈されたはずの電動車椅子の利用が、彼において生身の身体を否定する結果を導いているのである。バリアフリーやノーマライゼーションについての杉野昭博の見解に従い、電動車椅子の利用に「洗練された同化政策」を見ることもできる（杉野 1997：271）。健常者中心の「歩行」観からの離脱は、結局健常者中心の「移動」観に包摂される。その結果、障害者と健常者とが生身の身体をめぐる向き合う機会がなくなってしまうのだ。ここで、「健常者中心主義からの離脱」という解釈は否定される。

肉声で喋るのが彼女らにとって「自然な」行為であったとしても、それを「不自然な」ものとする人々との会話において、それを敢えて実行するのは楽でも「効率的」でもない点についても注意が必要である。実際、「聞き取れないから」と、介助者に通訳を求められる場合もあるし、また彼女の意に反してあからさまに無視される場合もあるのだ。「効率性の重視」と

いう解釈もここで否定されなければならない。

現実には、身体を否定を拒みトーキングエイドを使わない人が、時として文字盤¹⁵を使って会話をし、他方で移動の便宜を考えて電動車椅子を利用するといった事態が起こっている。道具と障害者と実際の関係には、このように相矛盾する解釈を可能にする多様性があるのだ。それ故、「健常者中心主義からの離脱」や「効率性の重視」といった、ア priori に設定された図式へ安易に還元するのではなく、個々の実践の場について丹念に読み解いていく作業が必要である。

「はばたく家」や「自立生活プログラム」において、単なる身体技法の習得ではなく、社会的な場面における実践が重視されていた点を思い起こしてみよう。障害者が電動車椅子に乗って移動する際にも、トーキングエイドを使わず肉声で喋る際にも、そこには、その「異様な」身体技法を眺め、階段や段差でその移動を助け、対話の相手となる他者、例えば近隣の住民や、駅員や、銀行員が存在している。障害者が街から疎外されていく中で分断されるようになった2つの世界が、ここで再び出会う。

身体技法の構築を、このような社会的関係の変容という視点から見ていこう。「重度」の言語障害を持った男性、藤崎さん（生活ホーム設立当時の入居者）を例として取り上げてみたい。上肢の自由が利かない彼は、僅かに動く足で電動車椅子を操作して街に出かける。買い物する場合、自分で商品を取ることができない為、その場に居合わせた人の手を借りることになる。彼の言葉が聞き取れない場合、居合わせた店員や他の客は、彼の視線を追って商品を選ぶ。YES/NO は、首が上下に揺れるか、左右に揺れるかで確かめられる。お金は、レジで店員が必要な額を財布から取り出す。同様のコミュニケーションは、銀行の手続きや電車に乗る場合でも行われる。一人で外出するはずのないと思われた障害者のペースに最初は戸惑った店員や駅員、銀行員も¹⁶、それが繰り返される中で、次第に彼とのコミュニケーションを熟達させ、その身体性に近づいていく。このように、言語障害／四肢麻痺の彼の身体が、実践の場面に置かれることで、異なる場所で生きていた

人々に出会いをもたらしている。

そもそも障害者と介助者との相互行為である介助の身体技法において、これは一層顕著になる。介助とは、食事や排泄など身辺の処理を一人でできなかった人が、他者の手を借りてそれを行うことである。「自立生活」においては、被介助者自身の意志や責任が尊重される。この点が、「管理・保護・配慮という名の下」に、障害者の主体性を制限する、家庭や入所施設の「介護」と対照的である（岡原 1995：122）。ここで、無力な障害者の為に、健常者がしてあげる行為といった、従来の障害者支援のイメージは否定される。そして、障害者の主体性に基づいた相互行為として、介助が新たに提示される。

このように介助の実践を通して、障害者には一人ではできなかった食事や排泄、着替え、外出が可能になる一方で、介助者は障害者の身体に気づき、そのペースに合わせていくことによって、それぞれ自己の有り様を変容させていく。

しかし「できないこと」と、「しないこと」との間に明確な区分は不可能である為、両者の間にコンフリクトはしばしば生じる。例えばこんなことがあった。藤崎さんの介助者が「歯を磨いてあげる」と言って、強引に口に突っ込んだ。しかし、普段入浴時に歯を磨く彼は、それを断固拒否した。この時「できないことをしてあげたい」という介助者の善意と、「しないこと」に決めた生活スタイルに拘る障害者の論理がぶつかったのである。

これと逆のケースもある。障害者の側が、自分と性格が合う人間に、その生活を見捨て、過度に介助を依頼してしまうのである。断りきれずに組み立てられた過密なスケジュールはいつしか破綻し、疲れ果てた彼／彼女は介助に入らないようになっていく¹⁷。このような日常の衝突を繰り返す中で、障害者、健常者それぞれの論理は、融合されることはなくとも、次第に接近していく。

具体的な介助の技法は、マニュアルではなく、当事者の口を通して、介助者に伝達される。確かにマニュアルがあれば、介助内容や手順が明確に示すことができる。障害者も新しい介助

者に一から教える必要はない。介助によって生じるコンフリクトも減少するかもしれない。しかし、それが一方で介助者主導の論理につながっていく。介助者は契約を遵守し、マニュアルを自分なりに解釈して介助を行えば、障害者とコミュニケーションをとる必要がなくなる。マニュアルがないことで、介助者は障害者の言葉に、例え聞き取り難くても、耳を傾けなければならない。それにより、介助者は障害者のペースに一層近づくことになる¹⁸。

以上のように「自立生活」の身体技法は、障害者と健常者との相互行為の中で構築されるものである。その為、そこで生じた変化を、障害者—健常者のそれぞれに分けて考えてはならず、またいずれか一方を、単純にその身体技法の主体、他方を客体と分けることも無意味であろう。必要なのは、それぞれに生じた変化を、両者が障害者の身体をめぐる出会った共通の場所に位置付け、一連の過程として考えることである。

構築された身体技法は、実践の場面で反復される中で、状況に応じて変化する。街には常に障害者を知らない人が存在するし、また複数の介助者との関係を均一化するのは不可能であり、不確定要素は何処まで行っても消えはしない。そしてまた、付き合いの長い介助者の場合は「しないこと」だったのが、他の人の場合は「できないこと」と判断され、介助の対象となってしまうこともある。それ故に、個々の場面における両者の関係性に応じ、常に微妙な変化が起こるのである。

身体技法を構築する一連の過程を経る中で、障害者の自己意識も変容していく。ある女性は、次のように語っている。

「わたしはひじょうにひっこみじあんで人とろくに話ができないし、家にお客さんがくるとかくれてしまう。人とあってもおうたいができないし、でんわもすごくこわかった。(…)

それがわらじの会、はばたく家でいやっていうほどに人にあう事がおい。(…)

私がわらじの会、はばたく家へ行くと私はだまっているわけにはいかず、なんかしゃべんなきゃならない。(…)

そのきびしいことは私にとってつよいにんげんになっていくように思います。いままで10代20代じだいにくらべてうそみたいにかわってきました。わらじの会、はばたく家にぜんぜん行かなかったらただすわてテレビ見たりラジオきいたりたまに手芸をやってそのまましをとって一生おわるうんめいになるかも（わらじの会 1982）」。

ここにおいて、「ただすわてテレビを見たりラジオをきいたりたまに手芸をやって」ただだけの生活から、わらじの会の活動を通して地域に出て、色々な人と触れ合う中で、「ひっこみじあんで人とろくに話ができない」、「人とあっても応対できない」彼女が、「つよいにんげんに」なっていくように、「うそみたいにかわってき」た変化が語られている。彼女の主体の有り様が、家の中に閉じ込められ、人と話ができなかった受動的なものから、家の外に出て、積極的に人と話ができる能動的なものへと変容しているのである。

その一方で、彼女らを取り囲む健常者においても、自己意識が変容していることを急いで付け加えなければならない。私が話を聞いたある男性の介助者は、次のように語っていた。

「ここ（ケアシステム）に登録するまでは、介助なんかしたことはありませんでした。仕事を探していて、なかなか見つからなくて、採用してくれたのがIさん（ケアシステムのコーディネーター）。入って世界が広がりました。街に居場所ができました。他の仕事をすることは、今は考えていません。金銭的にも豊かになったし、やりがいがあります。介助は天職だと思っています」

障害者との出会いによって、彼は地域の中に居場所を持ち、介助にやりがいを感じる主体として、新たに自己を見出しているのである。

同時に彼らの「障害（者）」についての意識にも変化が起きている。生活ホーム設立以降、定期的に介助に入るようになったある主婦は、次のように語っている。

「生活ホームというものが地域の中にできて、（一見自立なんてちょっと考えられないような）幸子さんだとか藤崎さんだとか、重度の障害をもった方々が実際に生活を始め、そこへいろいろな人が介護に入られたり様々に関わり合って生活が続けられていく。そういったことが行われる。そのこと自体が、私はすごい“仕事”ではないかと思うのです（矢野 1991：137）」。

3.4 実践共同体の再生産

この過程を、実践共同体という分析概念を通して見ていこう。それにあたって、わらじの会における十全的参加者である「自立生活する障害者」とは、どのような存在なのか考えてみる。

わらじの会の活動の目標である「自立生活」は、明確に定められるのではなく、「家を出て暮らすこと」という緩い規定があるだけである。その為、「自立生活」という言葉は多様に使用されている。

例えば藤崎さんは、生活ホームで「自立」を始めた矢先、土日だけは家に帰りたいと言ったのを、生活ホームの職員に咎められている。この職員にとって、介助者を自分で探すことも含めて「自立生活」であり、介助者が見つからないから、その日は家に帰るというのは許されざることなのである。一方、藤崎さんは自分の「自立生活」観を、次の言葉で表している。

「少し前までは、障害者が自立するというと、周囲のひとが何故かって聞いてくる。だから障害者も肩肘を張って、なにか七面倒くさい理由づけをしなければならなかった」。

「いいじゃん、地域でやってみたいんだから。それでいいじゃん（わらじの会 1996：35-36）」。

一連のやり取りの末、土日だけ実家に帰るという生活になった。当時の他の生活ホーム入居者も、次のように語っている。

「俺をみればわかるように、食事のことなんかまったく考えていないし、洗濯だって掃除だ

って週に一回だし、風呂だって気が向かないと入らない。(…)まあ、よかったことっていうと、いきつけの飲み屋ができたことと夜遅くまで遊んでいられるってことかな。そんなにがんばってやることもないしさ(わらじの会 1996: 53)」。

このように、「自立生活」という概念は、具体性を欠いているが故に、「介助者がいない時には家に帰る」生活にも、「食事や洗濯に気を使わない」生活についても適用される。

しかし、その適用範囲はどこまでなのだろうか。例えば、家を出てただ生活ホームで1日中テレビを見て暮らすことにも拡張できるのだろうか。ここで我々は、「自立生活する障害者」になる過程を、実践共同体の中に定位したことを思い起こさなければならない。彼らが行う生活を、実践共同体との関係という側面から見た時、展望が開けてくる。

藤崎さんが、休日自宅へ帰ることを余儀なくされたのは、実は介助者が確保できないからであった。この時期、ケアシステムは発足したばかりで、体制が安定せず、介助者探しは、生活ホーム入居者本人に委ねられていた。しかし、一人暮らしを始めたばかりの彼には、地域の中でのつながりは確立されておらず、また言語障害のある彼は、電話の扱いにもなれていなかったのである。その後、ケアシステムの運営が軌道に乗り、介助体制は確立された。藤崎さん自身、生活する中で、地域の中に様々なつながりができるようになるとともに、「自立生活」に必要な身体技法や、公的な制度の活用法についても習熟した¹⁹。そんな中で、実家に帰ることも少なくなっている。

これを、実践共同体へのアクセスという観点からまとめることができる。当初、ケアシステムや、介助者、地域社会、道具(電話)、公的制度といった、わらじの会の内部や、外部にありながらそれと関わりをもった諸要素と、彼との間に、緊密なアクセスは確立されていない。生活する中で、それらに対する十全なアクセスが可能になっていく。

重要なのは、諸要素それぞれへのアクセスの獲得は、実践共同体自体の再生産とつなが

ている点である。例えば、藤崎さんが家を出て、介助体制をつくり出すことは、地域社会にいる人を、介助者としてわらじの会の実践共同体内へ組み込むことである²⁰。また、ホームヘルパーの派遣や、全身性介護人派遣事業など、障害者の「自立」を支援する福祉制度も、単に文面としてあったものが、彼が利用することによって、その問題点も明らかになり、障害者が利用しやすいものへの改善が要求されていく。地域社会においても、彼らが電動車椅子を使って一人で街に出ることによって、駅にエレベーターが設置され、スーパーの入り口が大きくなるといった変化が起こるとともに、言語障害のある人に対応できる商店主や、銀行員が出てくる。このように、障害者が介助体制を確立し、福祉制度や道具の利用に習熟することが、一方で介助者、職員による支援者集団を組織し、わらじの会の内部をつくり出すとともに、それと日常的に関係を持つ外部の諸要素、つまり福祉制度や地域社会の範囲を広げていく。

ここまで来て、わらじの会における十全的参加者とは何なのか、明確な定義が可能になる。つまりそれは、わらじの会の内部やそれとつながりを持った外部の諸資源へ十全にアクセスし、それによって、実践共同体の再生産ができる人のことなのである。逆説的であるが、わらじの会における「自立生活」とは、独立した個人の営みではなく、地域内の様々な要素との関係に依存したものなのである。1日中テレビを見ているだけの人が、十全的参加者であるか否かは、この観点から判断しなければならない。

「自立」に至るまでの個人的な体験は、定期的に行われる話し合いの場や会報の中で語られることで共有されていく。その結果、「自立生活」についての共通理解が生まれ、実践共同体はより強固なものとなる²¹。それとともに、彼ら自身がリーダーとなることで、「自立生活プログラム」にもフィードバックされる。「はばたく家」において単に買い物や電車の利用であったものが、ここでは銀行での口座づくりや、自分担当の民生委員の訪問、そして生活保護など公的な制度の利用についての講習など、実際に生活する中で必要になった技法や知識の習得が、プログラムの中に加えられている。

3.5 浸透するカテゴリー

「自立する障害者になる」過程は、一見「自立する障害者」という排他的なカテゴリーが作り出すような印象を与える。しかし実践共同体への十全的なアクセスの獲得により、彼らが演じる役割の幅が増えることに注目しなければならない。

例えば、行政において、公的な支援の対象として、「障害者」や「介助者」というカテゴリーの範囲は明確に定められ、またその中も「身体障害者」、「知的障害者」といったように細分化されている。わらじの会が行政との折衝の中で獲得した補助も、全ては「障害者」であることに基づいて給付されるものである。その為、それを利用することが、「障害者」というカテゴリーの強化につながっていると見ることもできる。

しかしわらじの会の実践共同体の日常実践においては、このようなカテゴリーでは捉えられない、多様な関係がある。介助する／される側と言った役割を越えて、健常者と障害者の間の個人的な友好関係が存在しているのである。例えば、幸子さんや藤崎さんの部屋には、介助者ではない多くの人が世間話をしに来る。夫婦喧嘩の為に家出をした主婦が、生活ホームの大家である幸子さんの承諾を得て、体験入居室に転がり込んできたこともあった（わらじの会 1996）。このような関係は、障害者においても、健常者においても、一朝一夕に生まれるものではなく、日常的交わりの積み重ねを必要とする。

また行政が規定するカテゴリーでは単に「介助される側」でしかない障害者同士に、介助関係が生まれることもある。例えば、「自立生活プログラム」において、「知的障害者」の外出の付き添いを、電動車椅子に乗った脳性麻痺の人が行ったり、逆に「知的障害者」が手動車椅子を押したりといったことが起きている。障害の種類が違うことが、それぞれの介助を可能にするのである。また「自立生活プログラム」を補助する役割の職員が、体調を崩した時期があった。しかし彼女は休まずにそのまま活動に参加し、車椅子の参加者が中心になって活動を取

り仕切っている。この時のことを、参加者の1人は「あなたのことを介護していたと思うよ」と語っている。ここで「障害者」が「健常者」を介助／介護しているのである。

それ故に、公的なカテゴリーは時に流用される。例えば、「自立生活プログラム」において、脳性麻痺の参加者の車椅子を押した「知的障害者」が、「ガイドヘルパー」や「介護人」として介助料の支給を受けたことがあった。障害者を、健常者が一対一で介助するという行政の側のイメージは、これらの場面において巧妙にずらされているのである。

逆に行政との交渉においては、「障害者」と積極的に名乗られる。健常者である支援者の言葉よりも、障害当事者の言葉の方が、行政に対して説得力を持つからである。

「障害当事者」であることは、ケアシステムの運営においても重視されている。それには、「介助を受ける立場である障害者が運営に携わることによって、障害をもつ利用者の声を親身になって受け取ることができる」という理由がある。これに対して、確かに障害者の中にも多様な立場があるはずだと批判もできる。しかしケアシステム設立以前のボランティアによる介助が、「介助者の都合しだいになりがちだった」のは事実であり、当事者中心の状況へ転換を図ることには歴史的な意義があったと言える。これと同様の理由の為、「はばたく家」の活動が始まる際、障害者だけの話し合いが月一回行われるようになっている。

このように、法制度によって「障害者」と規定され、日常においても圧倒的な抑圧状況に置かれている人々が、わらじの会の実践共同体内で状況に応じて、「友人」や「介助者／介護人」、そして「障害者」として振る舞う。それによって、「知的障害者」や「身体障害者」、「健常者」といった、固定的なカテゴリーへの囲い込みを回避しながら、権利の保障や対等な介助関係の確立が図られ、自らに対して抑圧的に働く社会の布置をずらしていく。彼らは常に「障害者」や「介助者／介護人」であるのではない。公的な制度によって、また抑圧状況によってもたらされた「障害者」や「介助者／介護人」というカテゴリーを一時的に流用することで、当初意

図されていたものをずらし、多様な実践を創造しているのである。

4. 結びとして

——障害の構築から、障害をめぐる構築へ

「自立する障害者になる」ことは、所与の言説が与える「障害者」カテゴリーへ同一化していく個人の心理的過程ではない。そこには身体が常にまとわりつき、介助者や道具、そして地域社会と関係を取り結んでいる。そしてこの多様な関係の中で展開される相互行為によって、「障害（者）」や「自立生活」というカテゴリーが持つ意味も生まれていく。障害者－健常者という二分法的対立のみ目を向けていると、「支配社会」と「障害者」は切断され、実践の場において障害のある身体が媒介するこのような相互行為を見落としてしまう。

晩年のミシェル・フーコーは、言説権力による自己の客体化についての分析から、言説権力をめぐる自己の主体化についての分析へと転回を行う。後者を彼は「自己のテクノロジー」と命名し、以下のように要約する。

「自己のテクノロジーがあって、そのおかげで個々の人間は自分自身的手段を用いたり他人の助けを借りたりすることによって、自分自身の身体および魂、思考、行為、存在方法に働きかけることができるのであり、そのねらいは、幸福とか純潔とか知恵とか完全無欠とか不死とかなんらかの状態に達するために自分自身を変えることである。（フーコー 1990：20）」。

この論文で試みたのは、「自立生活」という状態へ向かい、障害のある身体をめぐる駆動していく自己のテクノロジーの探求であった。当初、この身体は家や入所施設、養護学校といった場所にあり、交わりは家族や入所施設の職員、教師といった特定の人間に限られていた。我々は、そんな場所にあった身体を、「自立生活」に向かって構築していくものとして、わらじの会の実践共同体を定位した。確かに障害者を取り囲む現実の厳しさには変わりはない。しかし障害のある身体は、そんな現実の中で、健

常者や地域社会、道具、そして公的な制度との間に、多様な関係を生み出していく。そこにおいて、未知のもの同士が出会い、相互行為を積み重ねていく中で、障害者の側に「自立生活」の身体技法と自己意識を持った主体が形成される一方、健常者の側に彼らに対して協調的な主体が形成されていく。そして抑圧状況に与えられた既存のカテゴリーが、時に流用されることで、障害者－健常者という二分法的対立では捉えられない、新たな意味が与えられていくのである。

「自立する障害者になる」とは、医療的、法制度的言説によって客体化された自己を、個人がそのまま内面化していく過程ではない。それは、障害のある身体をめぐる、医療的、法制度的言説を含んだ様々な要素が、時に対立し、時に協調し合いながら、「自立生活」や「障害（者）」といったカテゴリーを、そして主体としての自己を、再構築していく社会的な折衝の過程なのである。

参考文献

- 石川准 1999「障害、テクノロジー、アイデンティティ」、
石川准・長瀬修編『障害学への招待—社会、文化、デ
ィスアビリティ』(11-39 頁)、明石書店
- 市野川容孝 2000「ケアの社会化をめぐる」『現代思
想』vol.28-03 (114-125 頁)、青土社
- 岡原正幸 1995「コンフリクトへの自由—介助関係の
模索」安積他著、(121-146 頁)
- 小倉虫太郎 1998「私は、如何にして＜介助者＞とな
ったか?」『現代思想』vol.26-2 (184-191 頁)、青土
社
- 小松光一 1989『ヒト、ムラ、マツリの地域論：地域
の自立と祝祭』二期出版
- 酒井直樹 1997『日本思想という問題：翻訳と主体』
岩波書店
- 鈴木隆雄 2000「序章 儀礼と神話：ある解体の思考
の地勢図のために」鈴木隆雄＋真島一郎（編著）
前掲書 9-29
- ピエール＝マクシム・シュール、1983、『想像力と驚異』
白水社
- フーコー、M 1986 [1984]『性の歴史 快楽の活用』
（田村俣 訳）新潮社
- 1990[1988]『自己のテクノロジー』岩波書店
- 福島真人 1993「解説・認知という実践—「状況的学
習」への正統的で周辺的なコメンテール」、レイ
ヴ、J＋E・ウェンガー『状況に埋め込まれた学習』
(123-180 頁)、産業図書
- 矢野陽子 1991『まいにち生活です—街で生きる障害
者と共に』はる書房
- レイヴ、J・ウェンガー、E (Lave, Jean and Wenger,
Etienne) 1993[1991]『状況に埋め込まれた学習—正
統的周辺参加』(佐伯胖 訳) 産業図書
- 真島一郎 2000「終章 並置と混淆：モダンをこえた
読みの不自由について」鈴木隆雄＋真島一郎（編著）
『文化解体の想像力：シュルレアリスムと人類学的
思考の近代』人文書院：457-501
- わらじの会 1978～『月刊わらじ』
- 1982『「奥の部屋」から広い世界へ—とびだす仲間
たち』
- 1996『「おらっちの生活は自立つつうのになっ
てかい」：生活ホーム・オエヴィス報告集 P A R T』
千書房
- Frank, Gelya 1986 “On Embodiment: A Case Study
of Congenital Limb Deficiency in American
Culture.” Culture Medicine and Psychiatry 10
(1986), pp.189-219

注釈

- 1 わらじの会についての調査は卒業論文作成のため 2000
年に資料収集と関係者への筆者インタビューによる集
中調査を行った。その後、断続的に関係者への聞き取
りを続けている。
- 2 ここで取り上げるわらじの会は、現在、社会福祉法人、
通所授産施設、小規模作業所、2つの生活ホーム、ケア
システム、障害者就労支援センターなどの運営を行っ
ているとともに、筆者がかかわる見沼田んぼ福祉農園
の構成団体でもある。この論文ではわらじの会設立当
時から 90 年代中頃までの活動に注目する。
- 3 一方で、1978 年に養護学校の設置が義務づけられたこ
とによって、逆に地域に学校に通っていた子どもが障
害者として、養護学校に転校させられるという事態が
引き起こされている。
- 4 最低限の介助を保障する為の職員が、常勤 3 人、非常
勤 1 人雇われた。うち常勤 2 人は、メンバーの一人が
開業する病院（耳鼻科）からの派遣職員ということに
なっている。残り 2 人分の賃金は、市との交渉によって、
介護費用として、1983 年から支給されるようになった
毎年 240 万円の助成金によっていた。
- 5 当時の活動記録を見ると、1981 年 5 月に電動車椅子 2
台と、手動車椅子 2 台の支給申請がなされている。
- 6 わらじの会の内部資料、及びインタビューを参照。
- 7 内部資料によれば、ほとんどが毎週 1 回、全 12 回のプ
ログラムとしている。これが年 2 回行われていた。
- 8 「はばたく家」の活動は、「身体障害者」と分類される人々
中心に行われており、「知的障害者」の参加はまだ少な
かった。1982 年の資料に掲げられた活動の目標には、「重
度の障害をもつ身障者」という言葉しか出ていない（わ
らじの会 1982）。
- 9 全身性障害者介護人派遣事業は、越谷市の場合 1991
年に始まっている。これは障害当事者が推薦した介護
人に対して、介護時間に応じた介護費を、国 50%、県
25%、市町村 25% がそれぞれ支給する。2001 年時点の
越谷市では、時給 850 円、限度は月 96 時間であった。
- 10 「ケアシステムわら細工 趣意書」参照。
- 11 そもそもわらじの会発足の中心を担っていた障害児の親
たちの学校問題についての取り組みは、主に知的障害
児についてのものであった。その後、「精神障害者」と
分類される人の参加も出てきている。
- 12 社団法人埼玉障害者自立生活協会主催のセミナー（1998
年 10 月 25 日実施）における、わらじの会提出の資料
からの引用。
- 13 1983 年：活動助成金（年間 240 万円）の支給が決定。
1985 年：視覚障害者に限定されていたガイドヘルパー制
度（公共機関等への外出に際して介助者を雇うお金が、
登録した介助者に対して支給される）が、車椅子利用
者にまで拡大。1988 年：生活ホーム制度実施。1991 年：

全身性障害者介護人派遣事業実施。これらの制度は実施後も、適用される障害の種類や支給される金額の面において、次第に拡張されている。

- 14 ある脳性麻痺の男性は、「歩いたことがないから歩くことなんて想像できない」と語っていた。彼は夢の中でも、歩くことはないそうである。移動の権利が十分に保障されているなら、彼が無理をして歩く必要はないのかもしれない。しかし、社会において、しばしば歩くことが自然視され、歩けないことには否定的な意味が与えられる (Frank 1986)。
- 15 50 音が表示されており、対話の相手がその上を指で順番になぞり、該当する字で合図することを繰り返して会話を行う。
- 16 実際、街に出始めた当初は、店への入店を拒否されたり、駅員に乗車拒否をされることが多々あったそうだ。しかしこれは、数は減少しているが、今でも見られることである。
- 17 生活ホーム設立当初、藤崎さんや幸子さんは、それによって多く介助者との関係を失っている (わらじの会 1996)。
- 18 ここで、介助者と被介助者との関係が、そもそも非対称的である点は忘れてはならない。市野川容孝は、それを介助者から障害者へ注がれる一方的な眼差しに見ている。介助者は、自分の生活を、身体を被介助者にさらすことなく、彼の生活や身体へ介入しているのである (市野川 2000:124-125)。また、介助者は一人の障害者でいいのに対して、障害者は複数の介助者と付き合わなければならないという非対称性もある。
- 19 この時期、生活ホームの藤崎さんの部屋は、近所の高校生のたまり場になっている。銀行や商店の藤崎さんへの対応も、次第に確立されている。
- 20 私が実際に介助にはいていた I さんの例で述べれば、在宅—収容施設—地域という生活の場を変えていく中で、家族や、職員など特定の人間に限られていた関係が、学生や社会人、公的に派遣されるホームヘルパーなど、地域で生活する不特定多数の人間に広がっている。2000 年 9 月現在、その数は、学生 5 人、社会人 5 人、公的ホームヘルパー 4 人である。
- 21 レイヴとウェンガーは、実践や経験について語る能力を、実践共同体に記憶や内省の共同性をもたらしものとして重視している (レイヴ+ウェンガー 1993:89-95)。わらじの会では会報は毎月発行されている。話し合いはわらじの会の関係者全体に開かれた形で行うものが月一回ある他、活動するグループ毎に行われる会議や、手話の勉強会など、頻繁に催されている。中には運営面に関するものもあるが、そこにおいても個人の身の回りのことについてはしばしば話題にのぼる。井戸端会議的な集まりも多い。